



校長室だより

令和5年度

12月11日

NO.34

自分との戦い。走り切った先に得られるもの…

吐く息は白く、秦梨の朝の空にかすんで消えていきます。最後の落ち葉が、静かに乙川の水面に舞い落ちます。待ち焦がれた秋は、いつの間にか走り過ぎ、冬を感じさせる寒さは、すぐそこにあります。(学区の方には「こんなもんじゃないよ」と言われそうですが…)

そんな中、秦梨の冬の風物詩、子供たちのかけ足が、今年も11月24日より始まりました。中には、学校に登校してすぐに運動場に飛び出し、まだ冷え切った運動場を走り出す子供の姿もありました。長距離は、練習しただけ結果が表れる種目と言われます。走っているときは、つらくて苦しいですが、自分との戦いに打ち勝った先には、達成感が待っています。寒い中、体操服と短パンで走る子供たちは、寒く苦しそうではありますが、それに負けまいと戦う目は、とても強くたくましいです。

迎えたマラソン大会の12月7日は、暦の上では「大雪」ですが、いつになく温かく、頑張ろうとしている子供たちを応援しているようでした。(あいにく3年生は後日となりますが。)子供たちは、自分の目標を胸に、友久橋のスタートラインから駆け出します。秦梨小学校のマラソンコースは、距離も長く起伏に富んでいます。スタート後の上り坂は、大人なら出鼻をくじかれそうになりますが、子供たちの足取りは力強い



です。低学年でも、力強く地面をけり上げ、駆け上ります。頑張ろうとしている、そんな「挑戦」する気持ちが顔に表れます。ゴール前の下り坂は、子供の背中を押します。乙川に向かって駆け降りるような、爽快感を肌で感じながら、ラストスパートをかけます。ゴールへと続く川沿いの、通学路で応援してくれる仲間の声が、最後の苦しい気持ちを奮い立たせます。先生たちの手作りのゴール看板を目掛けて、子供たちは走り抜けます。

かけ足を応援してくださっていた学区の方が、こんなことを言ってくださいました。「見ていると元気をもらえる」「自分は走れんけど、がんばらにやいかんっていう気になる」と。マラソンに限らず、必死に物事に取り組む姿は、見る人に勇気を与えてくれます。応援したくなります。本来、応援する側が、応援される気持ちになる、それがスポーツの魅力でもあるかもしれません。足の速い遅いにかかわらず、その一生懸命が、多くの人の心に届いているのだと思うと、とてもうれしくなります。

マラソンにはドラマがあります。常に自問自答を繰り返したり、本番にだけその力を発揮したり、心にたぎる気持ちをわざと隠したり、ずっとライバルの背中を追い続けたり…。そのため、走り終えた後の子供の表情も様々です。走り切って満足な子、やっぱり悔しくてたまらない子、友達と頑張りをたたえあう子、長いかけ足が終わってほっとしている子…それはどの子も、真剣にこのマラソンに取り組んだ証であり、それが、子供たちの成長の証であると言えます。

